

# 高校生の発表会での表現活動の意義とその指導について

## －「課題研究」発表会の事例から－

農業科 高柳 真人

### 1. はじめに

平成6年度より総合学科を開設した筑波大学附属坂戸高等学校では、総合学科原則履修科目『課題研究』<sup>1)</sup>の指導過程で、生徒による学習発表会を行っている。『課題研究』の指導を進めるに当たり、発表会を行うことを構想したのは、いくつかの理由がある。

その一つは、『課題研究』の学習を通じて育成することが目指されている自発的、創造的な学習態度を具現化するために、主体的学習能力、判断力、課題発見能力の育成、知の総合化などとともに、表現力の育成を視野に入れた学習活動を構想する必要があると考えたからである。平成12年12月の教育課程審議会（木村孟会長）の最終答申で、「学力は、知識や技能だけでなく、学ぶ意欲や思考力、判断力、表現力などの資質や能力なども含めてとらえる」という学力観が示されたが、こうした学力観は、総合学科開設に当たり、既に提言されていたものであった。すなわち、平成5年の「高等学校教育の改革の推進について（第四次報告）－総合学科について（報告）－」において、「学力を単なる知識や技能の量の問題としてとらえるのではなく、それを支える能力や関心・意欲・態度の全体構造、さらに学校、家庭及び地域における学習や生活を通して生徒が自ら考え主体的に判断し行動するために必要な資質や能力などの総合力としてとらえることが重要である」と述べられている通りである（高等学校教育の改革の推進に関する会議、1993）。

『課題研究』の学習を通して生徒に身に付けさせたい学力も、こうした考えに基づいている。平久江（2000）は、主体的な学習の過程を、問題点や疑問点に気づく段階、問題点を明確にする段階、実際に解決する段階、学習の成果を検討し、結果としてまとめる段階などからなるとし、特に、問題を解決する段階において、「集めた情報を目的に合わせ、まとめたり、表現したりすることができなくてはならない」と述べている。また、『課題研究』のような、生徒自身の主体的な調査学習が中心となる学習活動を進める上では、方法知の習得に関わりの深い情報リテラシーの育成が重要な課題となる。情報リテラシーとは、「情報を収集し、分析し、組織化し、表現する力」（中野、2000）のことであるが、『課題研究』

の学習内容として挙げられる「調査、実験、研究」、「作品製作」、「産業現場等における学習」に取り組むとは、生徒自らが関心を持ったテーマを調べたり、興味を持った作品を製作することに留まらず、そこで学んだ内容をまとめあげ、他者に向けて表現することまでを含んでいると考えられる。この点を、堀川（2000）が、「調べたことを自分なりに加工して研究成果としてまとめたものを、新しい情報として発表することによって、子ども達は満足感・達成感を味わい、次の学習への意欲を強めていく。さまざまな発表方法を体験させて、コミュニケーションやプレゼンテーションの能力を高めさせよう」と述べている通り、生徒が将来進む現実社会で必要とされる、他者とコミュニケーションをとったり、プレゼンテーションを行う能力を育成することは、今後の教育でも取り組むべき重要な課題である。従って、レポートや報告書を作成することや、作品を製作することそれ自体を表現活動と呼んで何等差し支えないと考えられるが、その成果を発信することをも表現の指導に含むことで、より豊かな学習成果が挙げると考えてよいと思われる。

発表会を構想した二つ目の目的としては、方法知の学習をピアサポート型に行うことが挙げられる。生涯学習社会に生きる生徒は、学校卒業後も、学び続けることが必要になると考えられ、学校時代に、自ら学ぶ姿勢を身に付けるとともに、学び方を学んでおくこと、則ち、方法知の獲得が必要であると考えられる。その方策として、演習をはじめとする様々な学習形態が考えられるが、同級生の研究活動から学ぶことも重要な機会になると考えられた。学習の原理はモデリングということになるが、模倣対象が同級生であることで、親しみを感じながら、研究対象へのアプローチの仕方、結果のまとめ方、プレゼンテーションの仕方などを、無理なく学習できるのではないかと考えたのである。方法知の学習については、当然、教師による指導も考えられるが、それ以外の学習機会を設けることも有益であると考えられた。

また、学習成果の発表ということも考えた。筑波大学附属坂戸高校では、同じく総合学科原則履修科目である『産業社会と人間』の授業において、学習のまとめとし

て、1年次の9月に、生徒のライフプランの発表会を行っている。総合学科に入学した生徒が、『産業社会と人間』の授業を通じて、自己理解や、将来進んでいく社会について理解を深め、総合学科のシステムを活かしながら、夢の実現に向け、どう生きて行くのかということそれぞれの生徒が考え、代表者が、同級生や保護者、来賓の前で発表する機会が設けられている。この発表会は、自己のあり方生き方を考える機会となっているとともに、対外的にも、総合学科で行われている教育を理解して戴く機会となっている。同様に、総合学科の総まとめの科目『課題研究』の学習成果を発表することで、総合学科で3年間学んだ生徒達がどのように育ったのかを理解して戴こうと考え、保護者や地域の方々、また、他の総合学科開設校の教職員が参観する機会としたいと考えたのである。また、2年生も発表会に参加させることで、授業が始まる前に、主体的な学習を進める『課題研究』のイメージ作りや概要の理解を進めることもねらいとした。

もう一つ、発表会の開催を通じて考えたのは、生徒をエンパワーメントするということである。自分だけでなく、他の生徒の頑張っている姿を互に見たり、理解する機会を設けることで、自分達はこれだけできるんだといった自信や誇りを持たせたいと考えた。こうした自信や誇りを持つことが、主体的な学習を進める上で、重要な前提条件になると考えたのである。発表会やそこでの生徒の活動の意義を生徒にフィードバックするなどの工夫を通して、このことを実現しようと努めた。

安藤（1999）が、「総合学習の先進校では、学びのまとめを劇やオペレッタなどで表現したり、調べ学習の内容の発表会を開いたり、報告書や制作したものを展示したりすることが行われている。そのような企画の段階では、まず第1に、発表会や展示会などの目的をはっきりさせなければならない。保護者や地域の人々を招いて、学校の総合学習の理解と協力を促すためにするのか、それとも、学級の一人一人の子どもの学びの伸びを評価するために行うのかということ、発表や展示の仕方も異なる。…目的に応じた発表の仕方を工夫する必要がある」と指摘するように、発表会を何となく行ってみようかという態度で行うのではなく、実施する目的を明らかにして行うことが重要であると考えられる。筑波大学附属坂戸高校の場合は、先に述べた、発表力の育成、方法知を習得するモデリングの機会提供、学習成果発表の場、生徒のエンパワーメントといった4つの目的を達成するため、複数回の発表会を企画、実施してきた。

本研究では、そうした発表会が生徒にどのように受け取られ、どのような目的が達成できたのかということ、『課題研究』受講生の意識調査をもとに考察するものである。当初、手探り状態の部分もあった『課題研究』の指導の進め方も、年を重ねる毎に、様々な知見が積み重ねられ、一層の改善がみられてきたと思われるが、発表会については、まだ、十分な検討がなされておらず、今回、研究の対象として取り上げるものである。『課題研究』の授業終了後、発表会についての調査を行った平成10年度（3期生）、11年度（4期生）の調査結果をもとに、この点について検討を加えることとする。

## 2. 本校における『課題研究』発表会の概要

まず初めに、総合学科1期生が『課題研究』に取り組んだ平成8年度からの発表会のあらましを以下に示す<sup>2)</sup>。

### ① 平成8年度（1期生）

学年全体が参加する形式で、体育館を使用し、中間発表会と校内発表会が行われた。中間発表会では、16名の科目担当者が、担当する生徒の中から各1課題（1名または1グループ）を選び、合計16課題について途中経過の報告と今後の課題について発表が行われた。主たる目的は、研究方法のモデリングと、後半の学習に向けてのエンパワーメントである。校内発表会は、2年次生へのオリエンテーションも兼ね、2、3学年合同で行われ、研究成果が発表された。各科目担当者から1課題ずつ発表者を選出することを原則に、17課題の発表があった。

### ② 平成9年度（2期生）

前年度同様の形式、発表者の選考手続きで、中間発表会と校内発表会が行われた。中間発表会では、発表者をエンパワーメントする（発表してよかったと思わせる）目的で、生徒の質問を受け付けるのみならず、各発表者に対し、教員が必ず質問なりコメントをするようにした。校内発表会では、2年生へのオリエンテーションを兼ねる他、生徒の成長を見守る方々に学習成果を見て戴く目的で、筑波大学附属坂戸高等学校の将来を考える会の会員（坂戸市教育長等）や保護者を招待した。体育館で行われ、作品や報告書も展示した。発表会終了後、参観者から、感想や指導助言を戴くミニ研究会を行った。

### ③ 平成10年度（3期生）

この年度から、発表会の種類と回数が増え、中間発表会、クラス発表会、学年発表会、校内発表会が行われた。生徒全員に発表する機会を持たせたり、研究方法についてのモデリング効果を期待して、前年度、学年全体で行っていた中間発表会をクラス毎に全員参加で行う形式

とした。また、校内発表会に先立ち、クラスで全員が研究成果を発表するクラス発表会を設けた。その際、発表者をエンパワーする目的で、生徒全員に他の発表者に対する評価表を作成させ、終了後、科目担当者から全員に結果をフィードバックするようにした。また、他のクラスの生徒の様々な研究を知る機会を設けることと、校内発表会参加者の選抜を目的として、校内研究会に先立ち、学年発表会が行われた。各科目担当者から1課題ずつの発表者(合計16課題)が選出され、更に、発表状況や、参加生徒の評価も参考にしながら、科目担当者の協議により、校内発表会の発表者8名が選出された。校内発表会には、2年生の他、生徒をエンパワーする目的で、保護者、関東地区の総合学科開設校の教師を招待した。また、作品や報告書も展示した。会終了後、招待した総合学科開設校の教員などとともに、ミニ研究会を開催した。

#### ④ 平成11年度(4期生)

中間発表会、学年発表会、校内発表会が行われるのは平成11年度と同様であるが、学年末に行われるクラス発表会を分野別発表会とした。同じクラスのメンバーの研究発表は中間発表時に聞いているので、研究分野の関心の近い者の発表を聞く機会を設ける目的で、分野別(農業、工業、家庭、商業、普通科の5分野)の発表会を開いたものである。専門分野は、専門教室で、普通科に関する分野はHR教室で発表会が行われた。参加生徒の評価を参考に学年発表会、更に校内発表会の発表者が決められた。校内発表会には、2年生の他、保護者、関東地区総合学科開設校の教師、地域中学校校長などが参加して行われた。作品や報告書を展示したり、会終了後、ミニ研究会を開催したのも前年度と同様である。

### 3. 発表会に対する生徒の意識

『課題研究』の年間授業終了後、「『課題研究』の学習を終えて～3年生へのアンケート」と題する調査用紙を配布し、『課題研究』に関する生徒の意識調査を行った。調査用紙の配布及び実施は、HR担任に依頼し、即日実施、回収された。本研究では、平成10年度生(3期生)の回答(平成11年2月15日実施。回答数124)及び平成11年度生(4期生)の回答(平成12年3月17日実施。回答数134)のうち、発表会に関する調査結果を対象に分析、検討を加えるものとする。

質問項目は以下の通りである。質問文には、表現上の違いがみられるが、質問の意図は、生徒が発表会を通じて学んだことを明らかにしようとする点で共通しており、選択肢やコメント記入欄の形式は同じものとなっている。

[平成10年度]

#### 「調査依頼文」

今年度『課題研究』のまとめとなる校内発表会が終了しました。課題研究部会(課題研究担当者グループ)では、この機会に、『課題研究』を学んだ皆さんの意見や感想を聞かせてもらい、今後の指導の進め方について検討したり、参考にさせてほしいと考えています。少々量が多いかも知れませんが、この科目『課題研究』を立派な科目に育てていくためにもご協力の程よろしくお願い致します。

#### 「質問文と回答欄」

4.今年度は、中間発表会(クラス発表)、発表会(クラス、学年、校内)という段階を迫って発表会を行いました。発表会について意見を聞かせて下さい。選択肢がある場合は、当てはまるものに○をつけて下さい。「その他」や選択肢がない場合は、自由に書いて下さい。

#### ① 発表会についてどう思いますか

- ア) 発表してよかった
- イ) 発表はいやだった
- ウ) 学習をまとめる機会となった
- エ) 他者の発表を聞くことで自分の研究の参考になる
- オ) 発表の仕方を学べる
- カ) 他者の発表を聞くことで自分の励みになったり、自分の研究をふりかえれた
- キ) 発表している人を応援する気持ちで聞いた
- ク) 他者の発表に興味を持てなかった
- ケ) その他( )

生徒の表現力の育成については、選択肢ウ、オで、方法知を習得するモデリングの機会となったかどうかを選択肢エで、生徒のエンパワーメントの機会となっているかどうかを選択肢カで確認しようとした。また、学習成果の発表の場としての発表会に対する構えを選択肢ア、イ、キ、クで確認しようとした。

#### ② それぞれの発表会について簡単にコメントして下さい

- ア) 中間(クラス別)発表会( )
- イ) クラス発表会( )
- ウ) 学年発表会( )
- エ) 校内発表会( )

中間発表会、クラス発表会（平成11年度は分野別発表会）では、一人一人の発表を通じて表現力の育成、他者の発表を聞くことで研究方法のモデリング、同級生の頑張りを見ることでのエンパワーメントを目的としている。

学年発表会、校内発表会では、発表者の表現力育成とともに、参観する生徒にとっても表現方法を学ぶ際のモデルとなるよう、OHPや実物提示装置、パソコンなども用意し、発表方法にの仕方についても指導を行った。学習成果の報告という目的の他、司会進行も生徒が行い、3年生が主催する会であるという形式を取り、自分達の学年でこれだけのことができるという思いを持てるようなエンパワーメントも目的となっている。

〔平成11年度〕

「調査依頼文」

『課題研究』を学んだ皆さんの意見や感想をお聞かせ戴き、よりよい『課題研究』の進め方について検討したり指導の参考にしたいと考えています。科目『課題研究』を立派な科目に育てていきたいと思しますのでご協力の程宜しくお願い致します。書かれた内容の秘密を守り、個人の意見が特定できないよう結果は統計的に処理します。

※選択肢がある場合は当てはまる記号に○を付けて下さい。「その他」や選択肢がない場合は、自由に書いて下さい。

「質問文」

2. 発表会について

①発表会についてどう思いましたか

※選択肢は、平成10年度と同じ

②それぞれの発表会について簡単にコメントして下さい

※イ) 分野別発表会に変わる他は、平成10年度と同じ。

#### 4. 高校生の学習発表体験の意義

近年、ディベート形式の授業や、発表会をも含んだ調べ学習が注目を集めている。こうした表現活動を含んだ学習形態は、その過程で、目標の設定、情報の収集、まとめといった活動を必要とされるが、発表を行うためにはそれらの活動が有機的にまとめあげられる必要があり、総合的な学習が成立しやすいということができよう。

国際化、情報化の進展著しい社会を生きる生徒が、情報発信の手段としてのプレゼンテーション能力やコミュニケーション能力を育成することが、今後の重要な課題

となるが、まずは、プレゼンテーション体験、コミュニケーション体験を経験することから始めることであろう。

そうした体験を与える『課題研究』発表会について、生徒がどう思ったかという調査の結果を、図1に示す。

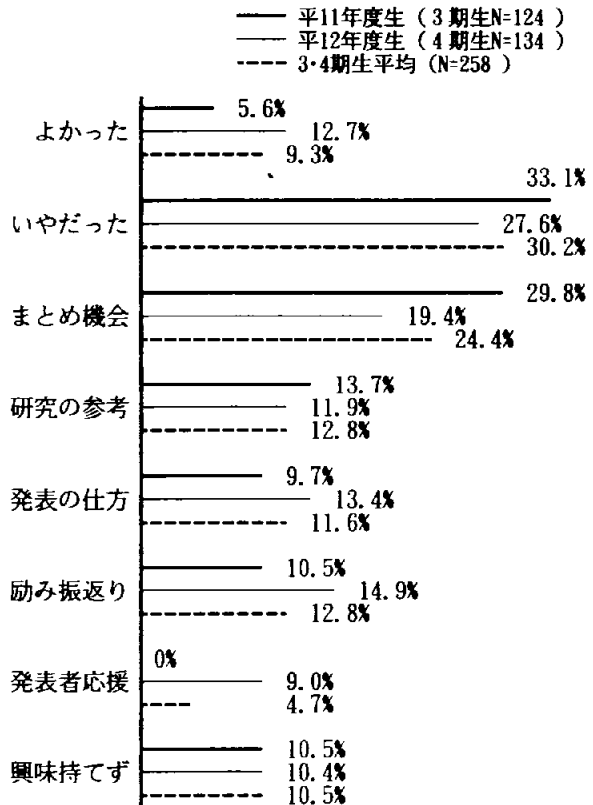


図1 発表会に対する生徒の感想

この結果から、筑波大学附属坂戸高校の『課題研究』発表会が、生徒の表現力の育成、モデリング、エンパワーメントの機会として、学習成果の発表の場として、どのように機能したのかを検討する。

##### (1) 生徒の表現力の育成

選択肢ウ、オの回答から、発表会と生徒の表現力の育成の関係を検討する。発表会が「ウ) 学習をまとめる機会となった」と回答したのは、3期生の29.8%、4期生の19.4%、平均24.4%の生徒であった。約4分の1の生徒が、発表会を通じて、自分の学習をまとめる機会を得ていることが示された。また、発表会で「オ) 発表の仕方を学べる」と回答した生徒は、3期生の9.7%、4期生の13.4%、平均11.4%であった。1割程度の生徒が、発表会を通じて、発表の仕方を学べたと回答していた。尚、両方を同時に選択している者は、3期生の3.0%、4期生の1.5%、平均2.7%であった。従って、3、4期生の平均で33.1%の者、すなわち、約3分の1の生徒が、発表会を通じて、学習をまとめたり、発表の方法を学べたということになる。このことから、発表会は、生徒の発表力

を育成する上で、一定の役割を担っているといつてもよいと思われる。また、学習をまとめる機会になるという項目の回答率が比較的高いのは、発表のための報告書や作品などを作成することが、そのまま学習のまとめにつながりやすいということが考えられる。一方、発表の仕方を学べるという点については、教師などからの指導や自らの発表体験から、また、同級生の発表を見てということになるが、1割前後という選択率から、一定数の生徒が学ぶ機会を提供できたともいえるが、指導内容の重要性に鑑みて、この項目の選択率を一層高めるような指導が行われることが期待されるであろう。

## (2) 方法知を習得するモデリングの機会

選択肢エの回答から、発表会が方法知を習得するためのモデリングの機会を提供しているかどうかを検討する。「エ）他者の発表を聞くことで自分の研究の参考になる」という項目を、3期生の13.7%、4期生の11.9%、平均で12.8%の生徒が選択した。1割強の生徒は、他の生徒の研究発表から、何かしら学ぶことがあったと回答している。これらの生徒には、発表会がモデリングの機会を提供しているということができよう。1割強という選択率は高いものとは言えないが、こうした生徒が存在するという事は、発表のプレゼンテーションの仕方を工夫したり、事前指導を工夫することで、発表会を方法知のモデリングの機会を提供する場として活用し得ることを示唆していると考えられる。

## (3) 生徒のエンパワーメントの機会

選択肢カの回答から、発表会が、生徒の意欲を高めたり、励ますエンパワーメントの機会となっているかを検討する。「カ）他者の発表を聞くことで自分の励みになったり、自分の研究をふりかえれた」という選択肢を選択したのは、3期生の10.5%、4期生の14.9%、平均で12.8%であった。1割強の生徒が、他の生徒の発表を見て、エンパワーされているといえよう。1割強という選択率は高いものとは言えないが、エンパワーされている生徒が存在するのも事実であり、発表会のプレゼンテーションの仕方や生徒へのフィードバックを工夫することで、発表会を生徒のエンパワーメントの機会を提供する場として活用し得ることが示唆されたと考えられる。

## (4) 学習成果の発表の場としての発表会に対する構え

発表会が、生徒の表現力を育成したり、方法知習得のモデリング、或いは生徒のエンパワーメントの機会として機能できるかどうかは、発表会の雰囲気や、そこに参加する生徒の構えがポジティブか、ネガティブかという

ことによる面も小さくないといえよう。選択肢ア、イ、キ、クの回答から、発表会に対する構えを検討する。

図1に示されたように、「ア）発表してよかった」という選択肢を選択した生徒が、3期生の5.6%、4期生の12.7%、平均9.3%と1割弱いる一方、「イ）発表はいやだった」という選択肢を選択した生徒が3期生の33.1%、4期生の27.6%、平均で30.2%存在した。このように生徒の3分の1近くが発表がいやだったとじてる。これら「いやだった」生徒について、「いやだった」という選択肢と同時に選んだ選択肢を調査したところ、図2のような結果が得られた。

すなわち、3,4期生の平均選択率でいえば、他の選択肢を選択しなかった者が73.1%、学習をまとめる機会と回答した者が5.1%、自分の研究の参考になると回答した者が5.4%、発表の仕方を学べたと回答した者が3.8%、自分の励みになったり、研究をふりかえれたと回答した者が2.6%、発表者を応援する気持ちで聞いたと回答した者が2.6%、興味を持たなかったと回答した者が10.3%であった。このように「発表はいやだった」と回答した者で他の選択肢を選択した者は多くないが、「他者の発表に興味を持たなかった」以外の選択肢を選択している者も3期生の22.0%、4期生の10.8%、平均で16.6%存在する。各項目の選択率は、全体の選択率に比べて低いということもできるが、別の見方をすると、これらの生徒は、自分が発表することをいやだと思いながらも、同時に、発表会を自分の研究をまとめる機会であるにとらえたり、研究の励みや振り返りの機会としているなど、発表することの意義を認めているといえよう。いやだと思ふ生徒も3分の1程度存在することを念頭に置いて指導計画を検討することは必要であろうが、同時に、いやでありながら、発表会の意義を認めている生徒の存在も示唆的である。すなわち、生徒がいやだと思わない指導法を考えていく（例えば、緊張をほぐす手だてを考えたり、発表会の人数を工夫するなど）とともに、発表会の意義を強調した指導の可能性も考えられるからである。やりたくないことはやらないというのではなく、やりたくない気持ちがあっても、やった方がよいと考えられることをやるという現実原則を提示する指導も考えられよう。発表してよかったという生徒に比べ、いやだったという生徒の方が多いいえ、発表をいやだと回答していない生徒に注目すれば、3期生、4期生とも7割程度存在しており、こちらの方が圧倒的に多いのも事実である。従って、生徒が発表をいやがるのではないかと考えて指導に消極的になるのではなく、発表に取り組み易くするような発

表方法の指導を行うとともに、発表することの意義などについても積極的に指導していくことが必要になる。尚、発表をいやだと思ふ生徒が、他者の発表に興味を持ってないとした割合は、平均10.3%であり、全体の選択率と変わらない。従って、発表がいやなことと、他者の発表に興味がないことは独立した関係になる。

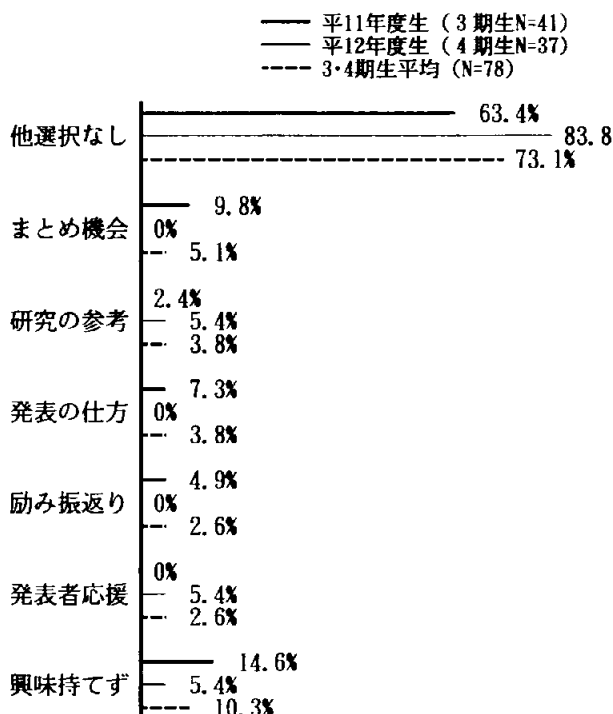


図2 発表がいやだった生徒の他の選択項目

また、図1に示されたように、「キ) 発表している人を応援する気持ちで聞いた」という選択肢を選択した者は、平均4.7%であったが、3期生は0%、4期生は9.7%であった。4期生の発表会は、事後に行われた、総合学科開設校からの参観者などに行ったミニ研究会の席でも、発表だけでなく、聞く態度もよい会であったと感想を戴いたものであり、生徒のこうした意識が発表会の在り方にもなにかの影響を与えているものと思われる。

「ク) 他者の発表に興味をもてなかった」という選択肢を選択した者は平均10.5%であった。それ以外の者すべてが、発表に強い興味を持っているかどうかはわからないが、他者の発表に興味がない者は1割程度と、そう多くないことが示された。

## 5. 高校生の発表体験学習の指導

4. で検討したように、筑波大学附属坂戸高校における『課題研究』の発表会に参加した生徒のうちの一定数の者は、自分自身が発表したり、同級生の発表を参観することを通じて、研究の進め方やまとめ方、発表の仕方

を学んだり、発表してよかったという成就感などを得ていることが示された。図1に示されたように、発表会に参加することで、「学習をまとめる機会となった」「他者の発表を聞くことで自分の研究の参考になる」「発表の仕方を学べる」「他者の発表を聞くことで自分の励みになったり、自分の研究をふりかえれた」の選択者が、3、4期生平均で、延べ61.6%になっており、発表会に参加する経験が、生徒の表現力育成、方法知のモデル、エンパワーメントなどの指導目標達成に一定の効果を持ち得ることを示唆する結果が得られたと考えられる。しかし、それぞれの選択率は「学習をまとめる機会」が24.4%であるのを除くと、各1割強であり、指導の進め方に尚改善の余地を残すと考えられた。

そこで、3. に示した各発表会に対する生徒のコメントを求める質問の回答から、発表会の指導に関する要望を読み取るとともに、発表会の指導の進め方について検討する。結果の分析をする際、生徒の発表会に対するコメントをその内容から、ポジティブなもの、ネガティブなものに分け、さらに、それぞれ、自分に関する記述、それ以外の発表会に関する記述に分けた。また、自分に関するポジティブな記述については、4. の調査結果に対応させるため、更に、「表現力育成」「モデリング」「エンパワーメント」に関する記述に分類した。

### (1) 中間発表会

〔平成11年度〕

#### ① 自分に関するポジティブなコメント (28)

「表現力」7  
 研究をまとめるいい機会3 一度整理できる1  
 自分なりの発表になった1  
 初めての発表なので力が入る1  
 表を模造紙に作ったりして積極的に取り組めた1  
 「モデリング」6

自分や周りの進行状況を知る機会になった4  
 周りに比べ自分の出来が反省できた1  
 皆いろんなことをやっていると思った1

「エンパワーメント」15  
 皆のが聞いてよかった・やっていたことがわかった6  
 よくできた3 皆頑張っていた2 自信がついた1  
 自分の研究を振り返れた1 ためになった1  
 これからやることが改めてわかった気がする1

#### ② 発表会に関するポジティブなコメント (7)

いい4 面白かった1 まあまあ1 意義があった1

#### ③ 自分に関するネガティブなコメント (33)

- 時期が早く大変 2 まだあまりできていない 2  
何を発表すればよいかわからなかった 2  
最初なのでまとまりが悪かった 2 準備不足 1  
内容がまとまっていなかったのでもやりにくい 1  
ほとんどできてなくて手こずった 1 緊張した 3  
もう少し早く進めないとと思った 1 大変だった 1  
研究成果が形になってなかった 1 はずかしい 1  
途中なのでよくわからなかった 1 疲れた 1  
やってなかったの言うことがなかった 1  
うまくいかず大変 1 だめ 1 発表に慣れてない 1  
社会の授業になってしまった 1 いやだった 3  
報告みたいになってしまった 1 つらかった 1  
やる気ない 1 てきとう 1 ダラダラしてしまった 1
- ④発表会に対するネガティブなコメント (15)  
必要ない 4 意味がない 2 長い 2 つまらぬ 2  
短すぎてよくわからなかった・時間短い 2  
皆発表に慣れていない 1 最悪 1 × 1

[平成12年度]

- ①自分に関するポジティブなコメント (23)  
「表現力」 3  
うまくできた 2 途中経過を発表できた 1  
「モデリング」 9  
参考になった 3 皆のテーマ・興味がわかった 4  
皆の進み具合がわかった 2  
「エンパワーメント」 11  
楽しかった (皆のを聞いて、短時間で) 3  
いろいろ (他分野、幅広く) 聞けてよかった 5  
出てよかった 1 面白かった 1 ドキドキ 1
- ②発表会に関するポジティブなコメント (9)  
よい 7 まあまあ 2
- ③自分に関するネガティブなコメント (31)  
研究途中のものを発表するのは難しい 2 緊張した 6  
まとめたレポートをそのまま読むので精いっぱい 2  
うまくできなかった 2 発表時間を長くってほしい 2  
あまり進んでない時の発表で大変 1 駄目だった 1  
まとまっていなくて発表には無理がある 1 いや 1  
まだまとまっていなかった 1 発表の難しさを知った 1  
途中でまとめるのが大変 1 全然まとまらなかった 1  
途中だったのでよくわからなかった 1 つらかった 1  
どこをどう説明してよいかわからなかった 1  
初めての発表で戸惑った 1 何を発表していいのか? 1  
簡単に終わらせてしまった 1 発表が大変 1  
テキトーだった 1 みんなわかってくれなかった 1

- ④発表会に対するネガティブなコメント (21)  
なくていい 7 分野によりわかりにくい 2 いや 2  
よくない 2 興味のない分野もあり少し退屈だった 1  
意味ない 2 時期が遅い方がいい 1 中途半端だった 1  
あまり聞いてなかった 1 つまらなかった 1  
途中だったのでよくわからなかった 1

図3に示すように、中間発表会に対してポジティブなコメントの割合が40.1%、ネガティブなコメントの割合が59.9%と、ネガティブなコメントの割合が多い。また、ポジティブ、ネガティブなコメントとも、自分に関するコメントが、合計68.8%と多数を占めている(図3)。自分に関するコメントが多いのは、全員が発表する形式の会であったことが理由として考えられる。先に示したように、発表会に参加することで、自分の研究をまとめることができたり、他の生徒の発表を聞いて、自他の進行状況を把握したり、研究の参考にしたり、聞いてよかった楽しかったというコメントが30.5%ある一方、初めての発表であったり、研究途中であったこともあって、どう発表していいのかわからなかったり、うまく発表できなかった、緊張したといった発表の仕方に関するコメントが、自分に関するネガティブなコメントの82.8%(全体の回答の31.7%)と大多数を占めた。残りのうちの15.6%は、いい加減、てきとくに取組んだという者であり、こうした生徒の動機付けについても考慮する必要がある。

前期最後の授業で行う中間発表会では、後期の研究活動を進めていく上で、同級生の頑張りを見て生徒をエンパワーすることや、研究テーマにどのような資料や援助資源を用いてアプローチしているかなどのモデリングの機会を提供し、各自の研究の軌道修正や、意欲的な取り組みを促すことを目的としている。クラス全員発表のため、発表時間が一人3分程度であることもあり、発表がうまいへたというよりは、自分の研究を振り返ったり、他者から学ぶ側面に重点が置かれている。回答では、図3に示されたように、合計して4分の1強の生徒は、モデリングやエンパワーメントに関するポジティブなコメントを書いており、中間発表会はこの点で一定の成果を挙げていると考えられる。しかし、3分程度の発表とはいえ、戸惑う生徒も相当数おり、表現力育成に関して、この時点から、研究のまとめ方、発表の仕方について、更に指導を深める必要があるように思われる。

3、4期生平均 N=167

ポジティブ 40.1%		ネガティブ 59.9%	
自分 30.5%	会 9.6%	自分 38.3%	発表会 21.6%

— 平11年度生(3期生N=83)  
— 平12年度生(4期生N=84)  
-- 3・4期生平均(N=167)

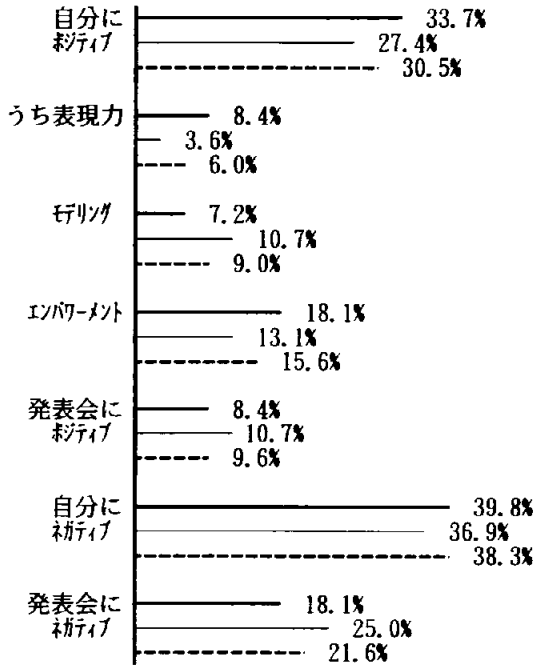


図3 中間発表会に対するポジティブ&ネガティブなコメントの割合

## (2) クラス発表会と分野別発表会

### 1) クラス発表会〔平成11年度〕

#### ①自分に関するポジティブなコメント(21)

「表現力」10

まとまってきたのでちゃんと言えた1 よくできた2  
それなりにできた1 前よりよくできた1  
少し落ちついてできた1 まとめる機会となった1  
製作したものを発表できた1 うまくまとめられた1  
何とかまとめて臨むことができた1

「モデリング」4

いろんな課題の発表を聞いてよかった1  
ためになった1 自分の研究の参考になった1  
いろいろと勉強になる1

「エンパワーメント」7

皆のが聞いてよかった4 聞いていてよかった1  
自信がついた1 個性が出ていてよかった1

#### ②発表会に関するポジティブなコメント(7)

いい2 楽しかった1 発表者を決めるのにいい1  
まとも1 面白かった1 ○1

#### ③自分に関するネガティブなコメント(30)

もっと時間があればもっとよくなった5  
あまり上手く伝えられなかった3 いやだった2  
報告書を読むだけだった2 はずかしい2  
まとめが中途半端で自信を持って発表できない2  
発表に慣れていない・発表の仕方が下手2  
やる気ない2 まとめるのに苦労した1  
要旨に少しつけ加えただけ1 大変だった1  
友達が発表してくれたので自分はいただけ1  
言うことがなかった1 聞いてくれてるかな1  
まだまだできていない1 よくなかった1  
緊張した1 人により進みがあったりなかったり1

#### ④発表会に対するネガティブなコメント(15)

必要ない4 長い2 中間発表と変わらない2  
つまらない2 要旨集を配るだけでいい1 最悪1  
意味ない3 資料を用意する1

### 2) 分野別発表会〔平成12年度〕

#### ①自分に関するポジティブなコメント(28)

「表現力」3

中間の反省を活かしてうまくできた1  
多少まとまった1 うまくできた1

「モデリング」16

参考になった7 いろいろ見れてよかった1  
皆の意見を聞いた2 皆の進み具合がわかった1  
勉強になった2 同じような研究発表を聞いた1  
同じ様なテーマでもそれぞれ工夫していた1  
それぞれの考えの違いを見れた1

「エンパワーメント」9

興味が持てた4 他の人の発表が素晴らしかった1  
気が引き締まった1 皆のを聞いて楽しかった1  
ワクワク1 面白かった1

#### ②発表会に関するポジティブなコメント(16)

よい8 まあまあ3 楽しく聞いた2 必要1  
どれも理解できた1 ちょっと大事1

#### ③自分に関するネガティブなコメント(18)

緊張した5 上手くできなかった3 駄目だった1  
まとめたレポートをそのまま読むので精いっぱい2  
発表時間を長くたってほしい2 いや1  
資料をまとめきれなかった1 発表の難しさを知った1  
要旨集を読む感じだった1 テキトーだった1

#### ④発表会に対するネガティブなコメント(17)

なくてよい3 意味ない3 いや2 よくなかった1  
よくわからなかった2 聞く人の態度が悪い1



期末前で大変だった 1 意外とバラバラだった 1  
 いい作品を選ぶということなら 1 つまらない 1  
 皆慣れないことをして変な感じ 1

研究成果を発表する最初の会であり、学年、校内発表会での発表者を選抜する目的もあるクラス発表会（3期生）、分野別発表会（4期生）に対し、ポジティブなコメントの割合が47.3%、ネガティブなコメントの割合が52.7%と、中間発表会に比べるとその割合は低下しているが、ネガティブなコメントの割合がやや多くなっている（図4）。ポジティブ、ネガティブなコメントとも、自分に関するコメントが、合計63.8%と多数を占めている（図4）。自分に関するコメントが多いのは、この発表会も全員が発表する形式の会であったためであろう。

3、4期生平均 N=152

ポジティブ 47.3%		ネガティブ 52.7%	
自分	発表会	自分	発表会
32.2%	15.1%	31.6%	21.1%

— 平11年度生(3期生N=73)  
 — 平12年度生(4期生N=79)  
 - - - 3・4期生平均(N=152)

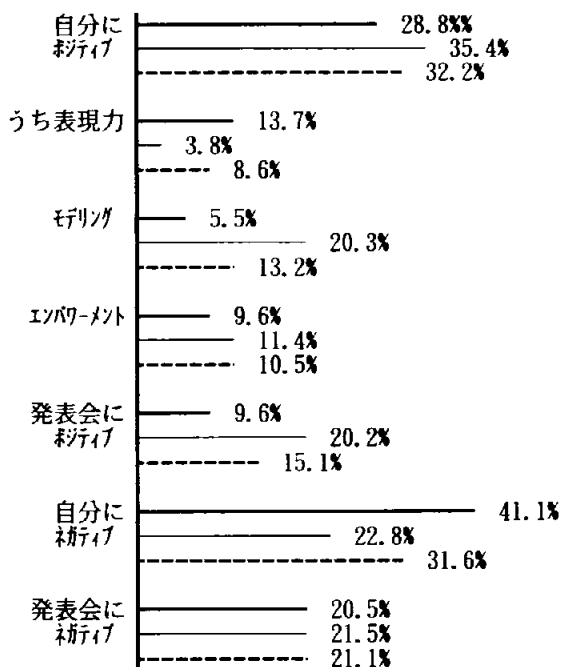


図4 クラス発表会(3期生)及び分野別発表会(4期生)に対するポジティブ&ネガティブなコメントの割合

自分に関するポジティブなコメントとしては、発表がうまくできたという者の割合が高く、中間発表を一度経験して、多少練習の効果がみられるのではないかと思われる。とはいえ、自分に関するネガティブなコメントのうち、いい加減、てきとうという回答は、8.3%のみであ

り、緊張したという回答を除けば、約8割の者が発表がうまくいかなかったことをコメントしている。研究活動や報告書の作成と平行して発表会が開かれること、全員が発表することから、個別のきめ細かい発表のための指導を行うことが難しい面があるが、この時点においても、限られた時間の中で発表できるように、いかにまとめ、資料を作成し、発表するかという指導が必要であると思われる。発表会に対するネガティブなコメントの中に、「資料を用意する」とか「つまらない」「中間発表と変わらない」といった記述がみられるが、発表方法が洗練されることで、参観者の不満が解消される部分は小さくないと思われ、指導の充実が望まれる。

クラス発表会と分野別発表会を別々に分析すると、クラス発表会では、ポジティブなコメントが38.4%、ネガティブなコメントが61.6%と、中間発表会よりもポジティブなコメントが減っている。一方、分野別発表会では、ポジティブなコメントが55.6%、ネガティブなコメントが44.4%と、ポジティブなコメントが多くなっている。図4に示されたように、分野別発表会では、発表会に対するポジティブなコメントが多く（クラス：分野別=9.6%：20.2%）、自分に関するネガティブなコメントが少ないこと（同=41.1%：22.8%）がその理由として挙げられる。特に、モデリングやエンパワメントに関するポジティブなコメントが多い。日頃、一緒に授業を受けている生徒同士での、テーマや取り上げる対象にもある程度共通点のみられる発表会であるという会の性格も関係していると思われる。研究成果の発表会を考えるに当たり、分野別発表会という形式で行うことの意義が認められるといえよう。

#### (4) 学年発表会

[平成11年度]

##### ①自分に関するポジティブなコメント(23)

「モデリング」7

参考になった 1 よくわかってよかった 1

いろいろ分野の違いがあると思った 1

貴重な意見が聞けた 1 皆よく考えていた 1

他の人がどんな研究をしているかよくわかった 1

いろいろと勉強になる 1

「エンパワメント」16

他の(クラスの)人の発表を聞いてよかった 6

頑張っていた 4 発表者はすごいなあと感心した 3

自信がついた 1 発表に興味を持てた 2

##### ②発表会に関するポジティブなコメント(13)

- よかった7 素晴らしいかった4 必要1 楽しかった1
- ③自分に関するネガティブなコメント(10)
- やる気ない1 不十分1 はずかしい1 緊張する1  
先生が協力してくれなかったので欠席した1  
もっと時間があればもっとよくなった1  
皆が聞いてなかったのでやる気が落ちた1  
自分達が指名されるとは思わなかった1  
いやだった1 関心を持って聞いていなかった1
- ④発表会に対するネガティブなコメント(30)
- 必要ない5 校内発表会があるから不要2 無駄1  
長かった2 最悪1 あってもなくてもいいかも1  
×1 つまらない2 うるさかった2 意味ない1  
拍手なんて気分悪い1 寒かった1 よくなかった1  
発表を聞くのは疲れる1 よくわからなかった2  
発表者の態度に問題1 いい発表だけに絞ってほしい1  
発表上手くなかった1 皆発表に慣れていない1  
レポートを読むのが多かった声が小さく聞きづらい1  
よりよい発表にするため資料を用意する1

[平成12年度]

- ①自分に関するポジティブなコメント(26)
- 「表現力」5  
プレゼンの仕方の勉強になった1 よくできた1  
まあまあできた1 わかりやすくまとめていた1  
発表の機会が増えたよかった1
- 「モデリング」8  
いい発表を聞ける3 いろいろ見れてよかった1  
参考になった2 多くの人の研究が聞けた2
- 「エンパワーメント」13  
楽しい1 面白かった2 皆しっかりやっている2  
すごかった3 皆いろんなことを考えたんだなあ1  
皆面白いことに取り組んでいることがわかった1  
気が引き締まった1 しっかりしていた1  
代表は大変だと思った1
- ②発表会に関するポジティブなコメント(20)
- よい11 プロい1 あってよい1 すばらしい1  
必要1 やや大事1 しっかりできていた1  
まとめでよかった1 すごい1 まあまあ1
- ③自分に関するネガティブなコメント(3)
- よくできなかった(準備不足)2  
発表時間を長くしてほしい1
- ④発表会に対するネガティブなコメント(23)
- 時間が長い4 必要ない2 プレゼンがつまらない2  
代表を選ぶのは大変1 意味ない1 よくわからない2

つかれた1 仮眠1 ねむねむ1 少々飽きる1  
よく見えなかった1 良し悪しの差が激しい1 いや1  
聞き手が集中できなかった1 校内発表と同じ2  
人の評価をするのは難しい1

図5に示すように、学年発表会に対して、ポジティブなコメントの割合が55.4%、一方、ネガティブなコメントの割合が44.6%と、ポジティブなコメントの割合が多くなっている。中間発表会、クラス・分野別発表会、学年発表会とも、自分に関するポジティブなコメントの割合は3割前後でほぼ同じ割合であり、特に、発表会に対するポジティブなコメントが増えていること(中間:クラス・分野別:学年=9.6%:15.1%:22.3%)、自分に関するネガティブなコメントが減っていること(同38.3%:31.6%:8.8%)がその理由として挙げられる。学年発表会では、代表者のみ発表するので、自分についてのネガティブなコメントや、ポジティブなコメントのうち、自分の表現力の育成に関するコメントが少なくなっていると考えられる。

発表会に対しては、クラス/分野別発表会で選ばれた代表が発表することもあり、「よかった」、「すばらしかった」というポジティブなコメントも増えている(同9.6%:15.1%:22.3%)。一方で、ネガティブなコメントも、それまでの2回の発表会では2割程度であったのに比べ、35.8%と増加した(同21.6%:21.1%:35.8%)。校内発表会に対するネガティブなコメントの47.2%は、「発表に慣れていない」ため「レポートを読むのが多かった」り、「声が小さく聞きづらい」、掲示物が「よく見えなかった」など、「発表がうまくない」といったプレゼンテーションの仕方に対する不満であった。学年発表会では、発表時間を一人5分程度とし、掲示物やOHP、実物提示装置なども活用した発表のできる体制をとっているが、日程の関係で、クラス/学年発表会の次の週に行われるため、資料作成や、プレゼンテーションの仕方の練習、指導が十分でなかったことも否めない。学年発表会は、生徒にとって、モデリングやエンパワーメントの機会として重要であり、発表する生徒にとっては、表現力育成の重要な機会でもある。クラス/分野別発表会の中から選ばれた発表者が発表しているので、ポジティブなコメントも、それ以前の2回の発表会に比べ、増えてはいるが、更に充実した発表会とするため、プレゼンテーションに関する指導の一層の充実が望まれるところである。

3、4期生平均 N=148

ポジティブ 55.4% | ネガティブ 44.6%

自分 33.1%	発表会 22.3%	自 8.8%	発表会 35.8%
-------------	--------------	-----------	--------------

— 平11年度生(3期生N=76)  
— 平12年度生(4期生N=72)  
- - 3・4期生平均(N=148)

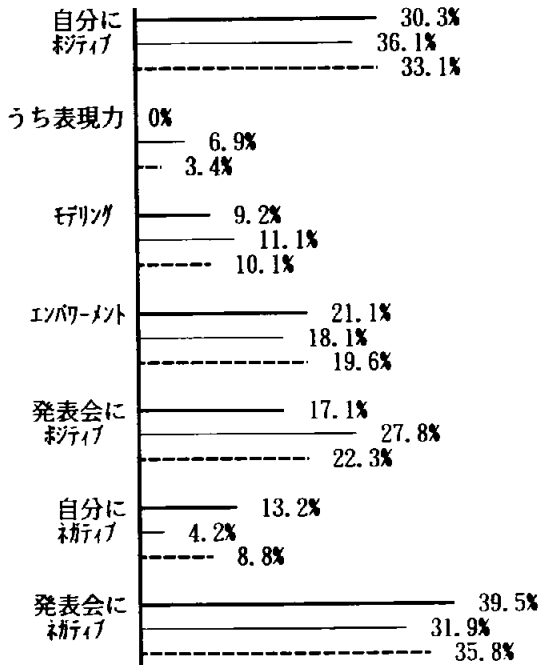


図5 学年発表会に対するポジティブ&ネガティブなコメントの割合

### (5) 校内発表会

(平成11年度)

#### ① 自分に関するポジティブなコメント (21)

「表現力」3

要旨原稿が納得できるものになった1  
自分なりにできた1自分でもよい発表だったと思う1

「モデリング」10

発表者に工夫がみられた(図表・機材・OHP)7  
わかりやすい発表が聞いてよかった1  
いろいろな研究内容が聞いてよかった1

発表の仕方が上手で聞きやすい2

「エンパワーメント」8

自信がついた1 皆よくやっていた1 感心した1  
友達の発表を手伝ってよかった1 もえてるな1  
発表者頑張っていた1 2年生頑張れ1 よく聞いた1

#### ② 発表会に関するポジティブなコメント (39)

すごかった・すばらしかった14 いい・よかった15  
さすがえりすぐりという感じがした1 とても大切1  
貴重な意見が聞いた1 内容の濃いものが多かった1

これで十分1 必要1 より詳しく聞いた1 ○1

時間がちょうどよかった1まとめという感じでよい1

#### ③ 自分に関するネガティブなコメント (5)

もっと時間があればもっとよくなった1  
やる気ない1 はずかしい1 緊張した1 疲れた1

#### ④ 発表会に対するネガティブなコメント (25)

寒かった4 面白くなかった2 うるさかった2  
学年発表会と違うメンバーで1 全員発表1  
他の人の研究成果に触れられなかった1 長い1  
4回聞けばさすがに飽きる1 もう一度聞かせるな1  
無駄1 最悪1 必要ない1 意味ない1

発表を聞くのは疲れる1 拍手なんて気分悪い1  
皆発表に慣れていない1 発表上手くなかった1  
画像見えない1 資料の用意1 保護者はいらない1

[平成12年度]

#### ① 自分に関するポジティブなコメント (29)

「表現力」3

うまくできた2 準備大変だがいい経験1

「モデリング」13

いろいろ見れて・聞いてよかった3 参考になった2  
わかりやすかった(スライド等)3 発表の仕方うまい2  
詳しい研究結果が聞いた1 まとまっていた1  
研究内容・方法とか自分にはないものを見れた1

「エンパワーメント」(13)

発表者はすごい6 工夫されて面白かった1 楽しい2  
さすが選ばれた人だけあった1 代表は大変と思った1  
皆いろんなことを考えたんだなあ1 堂々としていた1

#### ② 発表会に関するポジティブなコメント (20)

よい10 すごい3 まとめという感じ2 あってよい1  
まあまあ1 とても必要1 現状でよい1 重要1

#### ③ 自分に関するネガティブなコメント (1)

発表時間を長くしてほしい1

#### ④ 発表会に対するネガティブなコメント (23)

何度か聞いたのであまり聞けなかった5 長い2  
プレゼンがつまらない2 雰囲気暗い1 いや1  
寒かった3 あまりひきこまれない1 面倒臭い1  
熟睡1 聞いてなかった1 研究テーマが複雑1  
興味のないものは無意味極まる1 少々飽きる1  
わからない分野も1 学年発表会と同じ1

図6に示すように、校内発表会に対して、ポジティブなコメントの割合が66.9%、ネガティブなコメントの割合が33.1%と、ポジティブなコメントの割合が多くなっている。前3回の発表会と同様、自分に関するポジティブ

ブなコメントの割合は3割前後と、ほぼ同じ割合であった。全体的にポジティブなコメントが多くなっているのは、特に、発表会に対するポジティブなコメントが大幅に増えていること（中間:ｸﾗｽ/分野別: 学年: 校内=9.6%:15.1%:22.3%:36.2%）、自分に関するネガティブなコメントが3.7%とほとんどないことがその理由として挙げられる。校内発表会では、学年発表会の発表者の中から、更に選ばれた代表者のみ発表するので、学年発表会同様、自分についてのネガティブなコメントや、ポジティブなコメントのうち、自分の表現力の育成に関するコメントが少なくなっていると考えられる。

3、4期生平均 N=163

ポジティブ 66.9%		ネガティブ 33.1%	
自分 30.7%	発表会 36.2%	発表会 29.4%	自分 3.7%

— 平11年度生(3期生N=90)  
 — 平12年度生(4期生N=73)  
 - - - 3・4期生平均(N=163)

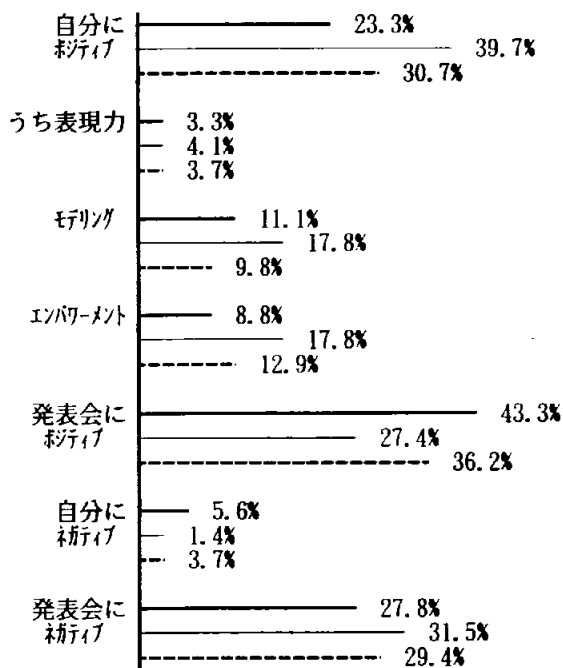


図6 校内発表会に対するポジティブ&ネガティブなコメントの割合

発表会に対するポジティブなコメントとして、「すごかった」、「すばらしかった」、「よかった」という意見が多く、「えりすぎりという感じがした」、「内容の濃いものが多かった」ことで「まとめという感じがした」のではないかと考えられる。発表者の発表が参考になるなどモデリングの効果や、発表者は「すごい」とか「頑張っていた」ので「楽しい」といったエンパワメントの効果があったといえよう。発表者にとっては、通算4

度め、発表用の機器を使うのも2度めとなり、「発表者に工夫がみられた(図表・機材・OHP)」、「わかりやすい」といったコメントが与えられるプレゼンテーションが行われ、このことが、発表会に対し、多くのポジティブなコメントをもたらしたと考えられる。校内発表会も、学年発表会の次の週に実施されたが、学年発表会の発表をふまえた指導が行われたこと、前日に、1回、リハーサルを行ったことなどの効果があったのではないかと思われる。とはいえ、「プレゼンがつまらない」、「あまりひきこまれない」、「発表がうまくない」といった発表者のプレゼンテーションに対するコメントも、ネガティブなコメント全体の15.1%あった。発表会が続くため、プレゼンテーションの指導のための時間を確保することが十分できなかったが、そのための指導時間を確保することも必要であると考えられる。

## 5. おわりに

筑波大学附属坂戸高校における『課題研究』では、生徒が、自らの興味・関心や将来の進路などを考えて選択した特色ある科目の学習や、進路指導をはじめとした自らの生き方なり方を考える機会を提供する特別活動などを通じて醸成された問題意識を出発点として主題が設定される<sup>2)</sup>。生徒は、教師の支援を受けつつ、主体的に調査・探究を行い、最終的に、調査・探求の過程や成果を報告書にまとめ、発表会で発表する。従って、この学習は、問題解決学習の一般的な形として工藤(1999 a)が示した、「7. 問題関心の醸成→4. 課題の設定→9. 調査・探求→1. 発表・表現」という学習過程を踏む「総合的な学習の時間」と同様の性格を持った問題解決学習の一典例である。本研究では、そのうち、発表会に参加した生徒の意識調査から、発表・表現過程の現状と今後の課題を検討した。

発表を通じて表現力の育成を、また、参観することを通して、研究方法や表現方法のモデリングの機会や、学習意欲や効力感、共感性育成につながると考えられるエンパワメントの機会を提供することを目標として発表会を運営してきた。その目標は、ある程度達成されたといえようが、尚、指導の改善を要する部分も残されている。特に、プレゼンテーションの指導が、生徒の表現力を育成する上でも、参観する生徒に対するモデリング、エンパワメントの機会を与えるという面でも重要な役割を担っていると言えよう。プレゼンテーションが比較的うまくいったと思われる校内発表会にポジティブなコメントが多く寄せられたことから、そう言えよう。

ところで、昨今の学校教育での教え込みの弊害がいわゆるように、プレゼンテーションの指導は、これまであまり行われてこなかったように思われる。しかし、その指導は、様々な場面で必要とされる生徒の表現力を育成する上で、今後ますます重要性を持つものと考えられる。そして、その指導は、教師にとって、本来、難しいものではないと思われる。教職の特性から考えて、教師はプレゼンテーションに関するノウハウを十分持っている。例えば、教師は、注入型といわれる講義形態の授業においても、授業の構成をどう組み立て、教材をどこでどう提示すれば効果的に教授できるかを考えたり、生徒指導を進める際、どのように生徒に働きかけたら、生徒が自らの行動の意味を理解したり、なすべきことを理解できるかといったことを考えながら行動している。教職を遂行する上で、教師の意図することをいかに伝えるか、理解させるかというソーシャルスキル的一种といってもよいプレゼンテーションの最適化の意識が常に働いているのである。従って、体験に基づく、或いは、専門性を生かしたプレゼンテーションの指導を行うため、教師は、その内容や方法を意識化しておくことも求められよう。

また、「発表・表現」活動においては、プレゼンテーションのスキルの習得以外に、「学習の結果や自分の考えを表現することによって自己存在感、効力感につなげることが期待され」たり、「友人の新しい側面を発見したり、協力性や共感性を高めることも重要なねらい」（工藤、1999b）となろう。発表体験を通して、自信を持つことや共感性を育てていくことは、「生きる力」を育成する上での根底となると考えられる。5.(5)に示した発表会に対するコメントの中にも、校内発表会で発表したことで「自信がついた」という記述がみられたり、図1に示したように「発表している人を応援する気持ちで聞いた」生徒が4期生の9.0%いるなど、「課題研究」発表会では、こうした側面の効果も期待できそうである。この点に関する指導の在り方や効果の検討については今後の課題としたい。いずれにせよ、今回得られた知見を活かしながら、生徒の実りある表現活動を可能にする方策を検討、実施していきたいと考えている。

## 註

- 1) 『課題研究』の目標は「多様な教科・科目の選択履修によって深められた知的好奇心等に基づいて自ら課題を設定し、その課題の解決を図る学習を通して、問題解決能力や自発的、創造的な学習態度を育てると

もに、自己の将来の進路選択を含め人間としての在り方生き方について考察させる」ことである。「総合学科における学習の総まとめの科目」、「将来への架け橋となる科目」などとも形容される。筑波大坂戸高校では、農業、工業、家庭、商業の専門教科から各3名、普通教科から4名の計16名が科目担当者として「課題研究部会」を構成し、授業案策定や実際の指導に当たっている。

- 2) 平成8年度から11年度途中までの『課題研究』の実施状況については、『平成9年度筑波大学附属坂戸高等学校研究成果報告書』、同校の『第4回総合学科研究大会資料集』などに報告されている。
- 3) 筑波大学附属坂戸高校の総合学科4期生に対する調査（平成12年3月実施。N=134）では、『課題研究』のテーマを決めたきっかけとして最も多かったのが、「興味・関心」(82.1%)であった。以下、「希望する進路」(36.6%)、「趣味」(23.9%)、「系列等で学んできた内容」(8.2%)と続く。この点については、筑波大学附属坂戸高校研究紀要第38集の拙著「総合学科における科目『課題研究』の主題設定の指導について」に詳しい。

## 引用文献

- 安藤輝次 1999 ネットワークの準備と実施 加藤幸次・安藤輝次『総合学習のためのネットワーク評価』 pp.156-157 黎明書房
- 平久江祐司 2000 学校図書館メディアの活用 高鷲元夫・堀川照代・平久江祐司編著 『学習指導と学校図書館』 pp.55-56 放送大学教育振興会
- 堀川照代 2000 情報・資料のまとめ方・発表の仕方とその指導 高鷲元夫・堀川照代・平久江祐司編著 『学習指導と学校図書館』 p.112 放送大学教育振興会
- 高等学校教育の改革の推進に関する会議 1993 高等学校教育の改革の推進について(第四次報告) -総合学科について(報告) -
- 工藤文三 1999 総合的な学習の時間の性格付けをめぐって 国立研究所広報 第123号 a:p.2 b:p.3 教育課程審議会(木村孟会長) 答申 2000 読売新聞 12.4
- 中野和光 2000 総合学習をいかに創るか-情報リテラシーの育成と総合的学習- 日本教育方法学会編『教育方法29 総合的学習と教科の基礎・基本』 p.44 図書文化